

学校経営における冒険的試行

Some trials on my School management

いぬい たか つぐ
乾 隆 次

序 論

“一隅を照らす”という言葉がある。近代生活の根源を培う自然科学上の偉大な発見や発明についても、その出現の契機は一本の試験管や一枚のプレパラートの中で営まれる瞬間の変化が相互に複合拡大して加速度的に巨大な成果をもたらしたもので、それぞれを要素に分解すると、単純な一個のマイクロコスモスを形成する明白な真理の結合に帰してしまう。古老が伝える火を吐く悪竜の民話がヒントとなって人形峠のウランが発見されたプロセスをしらべても、竜の息吹が雪を溶かして決して積もらせないとの事例に疑問を抱いた先覚者の英知がもたらしたものである。この自然現象を利用するために、ガイガー計数管が使用されて現代的な意味が与えられたという教訓がある。そこでいま世の中のあらゆる有形無形の事象を大なり小なりの類化財に転化させるのが教育者の道だと信じてこの小論を展開したい。

変化を属性とする物質界でもそうであるが、不変恒常を本性とする精神界にあってはどうか。試みに世界の四聖として、万人の心に永遠の悟りを授けた釈尊は、インドのガンジス河中流の狭い地域が行脚の地であるし、孔子が徳の道を説いたのは黄河流域の日本の半分程の範囲であったという。ソクラテスの行動の天地は、小都市アテネの一角にすぎず、イエスキリストの生きた場は、日本の四国地方にも及ばない小地方であったという。それが今日のように世界の隅々にまで慈悲の恩恵をもたらしているのであるから、この筆法を育英の世界に応用してみるのも有意義である。

カントの知、ペスタロッチの情、フィヒテの意など欧米の教育学者が実践した数々の教育活動を、現在の日本青年に実験的に課してその結果を診断するのではなければ、研修の価値も半減するのではあるまいか。銘刀の試し切りは凡夫の望むところ、私は生来、斗争観が人間の宿命だと思いつけている。政党の派閥、出身校による学閥、キリスト教の新旧の抗争、仏教各派の暗斗、同門内の憎悪、良心と本能、陰と陽、女と男、善と悪、ウイルスと白血球、正と反など二元的に解釈したくなる。しかも、その正体を確めないと安心できない傾向がある。往時購入していた数冊づゝの教育雑誌にのせられる内外の教育管理や学習指導の文献に接するにつれ、

学校経営における冒険的試行

せめて現役中に理論の実証をしておきたいとの宿願が頭をもたげてきた。良きにつけ悪きにつけ、実施してみなければ、生涯直接的にも、間接的にも試行することが出来ないと心配したからである。教育過熱の時期であるから、国際的な教育戦争がいよいよ激化されることは必定、師弟の関係を軍隊にたとえると、名將が精兵を指揮する場合、凡將が精兵を統御する場合、名將が雑兵を駆使する時、凡將が雑兵を操縦する時に区分できる。私は退職後の去就が内定していたので、後顧の憂いもなく、それら各項を実験してみたが未知の世界を探る好奇の念が行動を大胆にしていた。それと言うのも、男生が越境のために激増したとき男女別学を實行して、数学の成績を向上させたり、学閥の圧力に屈せず数旬を教頭兼務を強行したり、卒業式の教委の式辞を省略したり、体育祭を全廃し、修学旅行を簡素化したり、有名校と対抗学力競争を実施したり、予備校が實行している通り、新入生の成績序列を出身小学校を明記して玄関に出したり、思い残すことのない企画を拙速をもちとわず実現したりした実績があったからである。

以下順を追って、教師の指導性を高めた時どれだけの教育効果があがるか。青年心理の特色を学習指導に求めることが可能であるか。競争原理を師弟相互の研修に利用することができるか。その他校長の存在価値の実証的調査の跡などを展開していくことにする。

本 論

その1 教師の能力別組織

教育の効果を左右するものは教師の資質であることは洋の東西、時の古今を通じて喧伝されていることである。わが国の江戸時代においても寺子屋は6000とも 15000とも称せられ、私塾の中には、適塾や咸宣園のように門弟が3000人を数えるという大規模なものもあったが、すべて師匠や塾長の人徳学才を慕って弟子入りをしたものである。かの藤樹と蕃山、真淵と宣長の故事がこれを示している。だが近來は教えるより学習するという生徒の側に力点がおかれている。しかし現実では形式陶冶の方式がすたれ、昔の実質陶冶の注入方法に逆戻りして来たようである。指定された教材を限られた時間に消化させることを前提にしては、詰め込み主義の大量生産化は当然のことである。勝てば官軍、理会よりは理解、吟味よりは暗誦がアチーブ時代の戦術である。

たまたま私が赴任した学校は1個学年が24学級、計3400名の中学生を擁し、教職員が106人のマンモス校であった。部内の小学校は4校であり、住宅区、商業区、工業区、農村区に所在し、各学校の地域性を明白に示していたし、校長各位は手腕識見ともに熟知の間柄であったので、経営意欲というより、教育実験の野心が猛然と湧いてきた。年間百万円の図書費、プランプランによる教室利用、ドルトン方式、バズ学習、分団学習、促進教室など一度に沢山の試験をして、その効果を比較することができた。この頃は、各校ともに、特色を出すことが教

学校経営における冒険的試行

頭の昇進などにも影響力があったので百花斉芳の観があった。それには指導主事として文教地区や新開地区を担当し、各校の消長の跡をつぶさに審査して生きた証拠に接してきたという自信も手伝って、自分の意のままに企画を設定しては数量的に測定して、教育学上の尺度を創作したかったのである。公式公理に属しない別個の定理を模索したものといってよい。

実験の第1は学年の編制である。1年生全員1200人を3つのグループに編成し、8学級400人とする。等質に均分するために組み分けテストをする。小学校5、6年の教科書から、国社数理の科目を選び、自作の問題で実力というより、学習指導要領の到達度を調査して教科経営の資料とするためである。

入学前に、このテストに対処して特訓をする学校もあり、校長が成績を心痛する学校もあり、学級担任の手腕のパロメーターとする学校もあった。上位100人の中に占めるシェアを統計に表示して、累年の比較とすると興味の深い結果が出る。現行の相対評価は全く無意味なもので、教科により教員の個人差が著しく、仕上げの卒業学年を誰に担当させるかが校長の識見である。紛争したり、校内不和の学校の卒業生は劣悪な実力しか持っていない。これがマンモス学年の3年間でどんな発達曲線を示すか、スタートは同時である。

そもそもわが国の中学校の規模は、全国で5学級程度のものが多く、教頭に管理職手当が与えられるか否かの境界線の規模に頻数が多いというし、イギリスの初等学校では、450人が学校の定員であって、それを越える毎に数頭の増配があるという。即ち校長の管理能力の及ぶ範囲が400人—500人であることにヒントを得たものである。

まず第1グループたるAグループの主任は中堅の学究肌の後輩を任命し、2人の副主任は彼の選定に任せ、他の6人の学級担任は数理国社英の主要教科によって、校長が任命することにした。大体師範系か教育大学系かの信頼できるものとし、学級の編成は変わるが専任教師は卒業まで同一としたので学校は縦割りの体制をとった。Bグループの主任は元老教師を任じたが栄達の野心もなく趣味に生き社交性に富み、退職後のために利殖の道を考慮している人物で、忠実に校務を処理するが、身体的に虚弱なために万事消極的な点が見られた。Cグループの主任は経験年数十年未満の青年教師で、教育実習に参加した時、先輩兄姉の評判のよかった明朗な実行型の人士である。女教師が30%以上を示めているが、さしあたり年輩の適任者がみつからなかったからである。

校長として、新3年、新2年の推進幹部を予め抜き出して、残り全員を新1年の担任候補として、教科毎のカードに列記し、学歴も併記しておいた。Bグループ主任の氏名を発表し、その傘下に入る希望者をつのり、8人の学級担任を主任の意志に委しきめた。また最終のCグループの学級担任は主任が選び、副主任2人は互選とした。同一人物で双方から引かれる場合は教頭に調整をさせた。

これで中間管理職の設定には、各校で実施されている様式のすべてを含んだことになる。その功罪は卒業時の進学就職の成績によって判定するのが妥当である。

学校経営における冒険的試行

以上を要約すると、Aは聖職型で知性的、Bは非聖職型で情動的、Cは折衷型で意志的であろうか。このようにして、副主任は小校長、グループ主任は中校長、学年主任は大校長となり、校長はむしろ指導主事か教育長の性格をもち、学年主任はグループ主任の輪番制で、教務主任、生活主任、健康主任を兼務することにし、教頭としての素質を養ってきた。だが学校経営の点は本題から遊離しているのでグループ経営のうち、特に管理職を中心とする人的関係に焦点を絞って考えてみることにする。

そもそも教育の効果は、天の時、地の利、人の和の三位が一体となった折に最大となる。

生徒自身が学力向上の可能性を信じ、父兄も理解を続け、教師がその使命感に燃えた時が恵まれた天の時であって、鉄でも精錬の仕方によって鋼鉄ともなり軟鉄ともなり、いかなる名刀でも、ひとたび火炎にあぶられると回復不能の鈍刀になってしまうことを教訓とした。

学ぶは真似ぶであるが、低学年ほど教師が、立派なサンプルを示さねばならないのである。

すべからく失地回復の十字軍のように、逆境を脱出して目指す有名校に追いつこうとする悲願が期せずしてグループ内にみなぎった時に、神の激励の声を聴くことができるのである。人間は平等であって差別は許されないと言うが、エリートの心を忘れてはいけない。青少年は戦いの中に成長するのであるから、お山の大将の気迫を削ぎとるべきではない。学習心理学の示すところによると、学習の効果は、生徒の向上の意志が59.6%、学習環境が39.2%本人の遺伝素質が1.2%の要因となっている。本能としての勝利の意志をかきたて、同じく本能としての怠惰の誘惑を退けるのが、先達としての指導教官の責任である。手を拱いて成功することはいできない。無駄と知りつつ、努力を捧げるのが師道に徹する人の心情である。

世に人材の不足をなげく教頭や校長が多いが、優秀教員は成るものであって、決して在るものではない。あの恐怖の海のギャング、人喰い鮫も、元来は軟骨の魚であり、頭骨なども漁夫の小刀でもって、ずたずたに抉り取ることができるという。だから全身の硬さが歯という一点に集中しているのであろう。どんな学校の職員室にも優秀な先生が勤めているものである。それらの精鋭を集中してグループを編成し、切磋の原理によって自分の存在を自覚させていくのが、現状打破の突破口である。戦争の神と言われるプロイセンのカール・フォン・クラウゼヴィッツはその戦争論において、“戦術においては兵力を逐次使用しててもよいが、戦略においては兵力を必ず同時に使用しなければならぬ”と解いているが、学年内のA、B、Cグループ間の競争は1時的に行動の功罪が測定できるが、近隣の僚校との比較や、過去の自校の進展のあとは全校の協同責任でなくてはならない。外患に直面しては区々たる内憂は解消するものである。

私は転勤の度毎に、自校3年間の進学成績を調べて、その実態をつかみ、どのように改良の策を講じようかを熟考することにしてしている。それが自己との嬉しい戦いであると信じている。PPMでも何でもよいから、数量的に比較の係数が欲しいので全力を傾注するのが仕事冥利と考えている。

学校経営における冒険的試行

この点、Aグループは自分の意志の代行者であると大切に思い、自分の生涯の宿願達成の尖兵であるとみなしていた。

次は地の利である。これは広く解釈すると家庭環境や地域性を含むものであるが、教室の学習環境に限定してみる。街道やバス停、十字路の交通信号に面すると、60フオン近くもあって到底、ゆったりと学習もできない。理想の教室としては奥まった隅の室で、落葉樹に囲まれ、床にダニ等のわいていない室、黒板などが新装で反射せず、壁の色が薄青系統で、机、腰掛が座高に合致、照明完備で音楽室やグラウンドから離れ、教官室に近接しているのが理想である。

近頃のように、経費節減の立場から、中廊下一棟建の校舎が流行しているが、教室管理や教科経営の未熟な教師と隣接している時など、時間割が固定している場合、致命的な損害をうける。食堂への通路に面する教室などは昼食前の授業は特に能率があがらない。うまそうなウドンの香りが、風によって広がると学習の意欲も消えてしまう。

だから、実験の振幅を拡大するために、Aグループには最良の教室を使用させた。現状で許される最も恵まれた環境で、優秀な教師がエリート意識に燃え易いようにしたものであって、時々教室を交換したり、ゲーリー・システムも実施しなかった。外来の視察者などが参観にきたり、教育実習で多くの学生が参加する時にも、施設、設備がどんなに学習効果を左右しているかの事例として使用した。

次は人の和たる教員組織である。学校では名目上の役職者と、実力を持つ推進者とがあって、生徒を引張っていくのは、進取の気象を抱く専門家である。生徒の眼は鋭敏である。

どんなに虚勢をはり、権力を誇示しても、担任の正体は良くつかまれ、内心の軽蔑は巧妙にかくされているにすぎないのである。

現職につきながら、上級の位置をねらって自己研修に没頭するリーダーは部下の信望を得ているし、それが同じ釜の飯をたべた同窓の間柄であると、些細な利益社会が直ちに、巨大な協同社会になり、少々難点は大きなルツボの中で浄化されて、合力のハーモニーを奏でることになり、万事を善意に解釈するから、教官室にも笑声が絶えない。実習生も同化されて教職にあこがれるなど長所があった。当時は教員の就任内申は校長にあったので好ましい教生は、次年度には本校の教諭に任せられたが、現在は閥を嫌って、わざと校長の希望は妨げる仕組みになっている。

その2 校長の指導助言

さて、このように気心の通じ、後進として愛情の持てる教師集団に色々の注文を出し、忠言も浴びせてきたが、素直に謙虚に聴いてくれ、流石に血は水より濃いものだと言った。

丁度この頃、タナベKKから、パスポンと言う頭の良くなる薬が発売され、その効果をテストしてほしいと頼まれたことがある。早速Aグループの2個学級で使用してみた。組の半数に

学校経営における冒険的試行

擬製パスポン、半数に正真のパスポンを服用させ、一年後に全教科の成績を比較したら、10%位パスポングループが良成績であった。同時実施の布施中学校でも同様であったと言う。慶応の林教授や東京教育大の杉博士の著書がよく売れた頃である。

暗示にかかるのか、擬製のカルシューム錠のグループも、非服用者より若干良好であった。こんな実験にも同窓なればこそ反対もせずに実施してくれる等有難いことであった。

元来、私は授業時間数重視に疑問を抱いている。ドルトンプランや、ノングレードシステムが好ましい。明治の飛び越し学制などは先見の明があると思っている。だから全校一斉に簡単な教科の共通テストを実施し、60点以上を合格者とし、第6級者とした。一年生の前期終了程度である。次に一年終了程度の第5級、中学三年修了程度の第1級と逐次淘汰し、最後は高校入試程度の特級を実施する頃は100人未満になり、トップにはバッジと賞品を与えるシステムにした。

出題はすべて私が担当、採点も独自でやり事務的なことは教頭がやった。教科書以外の応用問題も含め広範なものであるが、各グループの受験対策に教員の生徒に対する心根が現われていた。私の出題傾向を分析して予備テストを実施したり、放課後の補習をする学級もでてくるし、休暇中に特訓したり様々であった。学年により、グループにより、学級によって特色を呈するが、Aグループの進況は日を追い、年を経て顕著になり、科学的に誤答分析をしては、その結果を生徒各自の失敗帳に記録させていたが、すべてのテストの整理をすることで、グループ担当者の指導の盲点がわかり、教員図書購入や、教員採用時の専攻の点検の参考にした。第6級で不合格となった者は級外甲として、小学校6年程度、級外乙…丙と順次負け残りとして、倦みの心を療やしてみたが、グループ毎の促進教育にも指導の熱意差が見られ、生徒の学習意欲は教師の熱に左右されることが解った。

優秀者とは反対に遅進生では、学年差も認められないものである。級外テストの敗残者には級友の同情者が出現し、学級委員の篤志家が個別指導をすることもあり、雨の日の放課後は数々の教室で生徒の相互研修が見られ、ベルとかランカスター、あるいは日田の咸宜園の助教、助手の制度が見られる。しかし、次第に残存者が少なくなると、3人を1組として同一問題の協同答案を書かせたが、決して文珠の知恵にはならないものである。

これらは、生徒の学年の枠を外した総合的なものであるが、部分的なものとして、各教科別の学級対抗学力コンクールをした。これは学級経営上の担任の創意を發揮させるチャンスを作ったものである。即ち英数国理社その他の2教科につき、毎土曜日に2人づゝの選手を出し、20分のテストを受けさせる。出題、採点ともに私がやるが、成績の結果は棒グラフにして各グループ、組毎に教頭が掲示し、学年単位で第3位までには名誉加算をしてやり、第2回目からは40点以下は缺で切り捨て失格とする。70本の棒のどこが早々と姿を消すか、掲示板前の話題になる。近くより遠くに、易より難に問題の程度をあげていくが、興味のない担任は出籍簿の順に選手を出したり、生徒委員にまかせたりして、人選が妥当でないと、不得意な科目に出場

学校経営における冒険的試行

して数回で失敗、優秀生が不出場になったりする。良心的なAグループでは、教科担任と相談し、永く残存しようとする。即ちバッテリー順の巧拙により勝負がきまるなど、担任の熱意の程が知れるし、生徒の競争心をかきたてることができ、学習のゲーム化になる。回を追う毎に作題が困難になるが、高校入試の問題と類似であったりすると自尊心が満足できる。その他、1日1題として、数学の問題をAランクからDランク迄100枚を掲示板にぶらさげておいて、解答を投票箱に入れさせ、合格不合格の捺印をして、グループ毎に返却、合格印5個で優のチケット、チケット10枚で賞品と交換し、ランクの難易番号に合せて氏名を記入した大カードを設置したがAグループの提出が圧倒的に多かった。

Dクラスの問題を大学で実施したら合格が4割を割ったことから見て、中学生の程度も馬鹿にならない。Aランクは数学担任にも援助してもらおうなど、工夫によって師弟の熱情をかきたててみた。

その3 難点の効用

だが幸か不幸かAグループの英語の教師が悪性のガンとの診察を受けて休むことになった。教委からの人員配当はない。仕方がないので、週5時間を週3時間に減じ、1人で8クラスを担当させた。教授は重点的に骨子を説き教師用の解説書のリコピーを配布して、通信教育式の講義録とした。便所の落し紙に英単語を記入して1日1枚、1字1枚の余暇善用をすすめたり、自学の妙策を暗示した。

成績を心配したが年度末の共通テストでB、Cグループと同点であった。だからこれを他教科に普及したら、人件費の節減になること必定である。企業関係では低質の社員10人より、優秀社員1人の力量を重視するという。特に学校等は生徒の程度にスライドして教える技術が大切なので教師の質を高めただけ定員を減じ、その分だけ単位時間の報酬を増加したらよいであろう。

その他、数学などは男女別学、英語は共学の方が効果があがることを実験した。

また予習か復習かの課題に対応するために予習の友なるプリントを作って全校に配布したが、全職員が分担して教科書の重要事項を網羅して註を作り、学校図書館にある参考書による完全なインデックスを完成したものである。

大きな労力と費用が伴うものの、教壇での時間が節約でき、教師の神経が減耗するのを予防した。充実した予習が与えられると復習は不要になることも実験し、教科の質問箱の利用を分類するとAグループが最高であることが判明、良い質問は解答と共に教務の黒板に発表するなど、生徒を動かす源泉たる教師の垂範を促すことを忘れなかった。

ある液体がアルカリか不明な時は、リトマス試験紙を投入するのが常道であるが、場合によっては塩素酸カリウムに添加する二酸化マンガンのように触媒としての作用をするのが経営者の常識でもある。今迄は学習指導要領という正規のコースを何分何秒で走るかが、義務であっ

学校経営における冒険的試行

たけれども、今後は何分間に何処まで走破するかが課題になってきた。

一定のノルマを征服した者は自由に私有の時間を持つのが望ましい。学業も運動も趣味も不適当な分野は免除してやるのが、教師の道義である。運動場で生徒をしごいている姿程腹立たしいものはない。

主任の抱負が師弟の学習に反映していることもあるが、PTAとの協力の巧拙により、有力な相談者の有無によっても、知徳体の面で矛盾が生まれることもあり、管理者の手腕がグループの士気に関係していることもわかる。

昭和49年の文部省統計によれば全国公立小中学校の教員の平均年齢は39.7歳であり、管理職になるのは1割未満なのであるから、マンモス校のグループ主任は校長実習、教頭実習を兼ねていると思われる。主任を交代する場合も実情をよく聴いてから、決断をしていく。田舎の小規模校の校長より、学歴年齢ともにグループ主任が上位であるのに、待遇はずっと劣っているので、せめて精神的な待遇を味って欲しいのである。私は、グループの構成員の勤務評定を、公文書の65項目の評価に換算して数量化してみた。学級指導案、週案、研究論文、学級日誌、出勤状況など分掌校務の処理から、父兄の評判をも加味して個人の指導力を計算し、それを授業時数に乗じて質×量の実数を出し、グループの指導力総和を算出し、テストの得点順位と比較してみたが毎回正比の相関を示し、生徒のI・Qよりも教師の姿勢の重要なことを知った。卒業成績を絶対評価の素点で列挙すると、Aグループの男子が上位を占め、学年単位1200人の内申序列にすると、10点評価は36人であるから、B、Cグループは全滅になるので、グループ別の相対評価にして、公正を期した。こうなると劣等のグループに属している生徒は有利で実力がなくても、内申で乙級の公立高に合格するので、ある高校には120人の合格者を出し、父兄も驚いたし、総計して例年より20%も多く公立高合格者を出し、超一流校へは5割増の高率であった。ひとたび生徒の自尊心を満足させると、あとは堅実な校風が生まれる。しかもマンモスなるが故に校長の恣意にも似た教育の生態実験にも被害が希薄になり、上司から禁令の出た頃には統計データは完備という段取になり次の企画に移っていく。このようにして誕生月別では6月が、体格別では長身肥満者、体力別では皆勤組、地域別では住宅区などが最高であることが明白になった。大学の附属校や研究室の小さい母体、海外異民族の統計では満足できない資料の更新ができた。

マンモス校で70学級もあるので、近くの短大の美術専攻、英語専攻の実習生60人もすんなり受け入れるし、相愛大学も25人程は無条件で承諾してもさして困却はしなかった。

在勤5年の間に、5000人からの生徒に接触したが校長テストの成績表やグラフから協力一致して学力向上に熱中していた頃が、あふれるような追想をもたらす。

以上のことから類推して、大阪府の総合選抜制は至難であろう。同一校内でも学級差は指導差を伴って生まれてくる。もしA、B、Cの3グループを通算して序列内申を入試資料とするならばAは全員、Bは $\frac{1}{3}$ 、Cは $\frac{1}{3}$ が合格になるであろうし、生徒、父兄には何の責任もないの

に進学不能になるのは不公平である。世の中には平等という現実がない。だから夢のような平等を彼岸に空想するのであって、遅進生と優秀生があるように、遅進校と優秀校があるから、内申成績など妥当性が皆無である。高校の格差是正は、校内の格差を激増させる。差別をなくして平等の得点を与えるのでは試験の意味がなくなるのに、知能偏差値やIQを算定し、その活用はほとんど考えられない。悪い素質を知って本人が得をするであろうか。医師が、知らせる必要があればある程、当人に病状や病因をかくすのと同様である。最近では幼稚園の塾ができて知能指数を上昇させたり、口答試問のリハーサルをしているらしい。教育産業が学校不信を裏付ける様に大繁昌をし、アルバイト、プレゼント。リベートの教員根性をあふっている。最後に私は終着駅としての中規模校に転任した。前任校長はまた同一人物だったので要領がわかっていたが、学習の面でも、躰の面でも天と地の差であったので思い切って荒療治を試してみた。有力父兄の涙の哀訴が持ち前の性急心をかきたてることと、自尊心のうめきの所産である。最精鋭の主任級を新3年に、次を新1年に、次を新2年の受け持ちとし、全身の力をつくし、過去の成功例を駆使してみた。重病人に対する秘薬の効果を祈る医師の心根であるが、少しづつ功績らしい傾向が生まれてきた。越境生の里帰り、逆越境の兆、不良行為の減少などである。業者のテストも、府下8万の受験生の平均値超過者が22%から65%に上昇、高校進学も超一流高は20倍の合格増になり、全校の劣等感が消滅していった。これで我が事終れりの満足があったので残りの1年間は、健康上の忠告をもっけの幸として最も進歩的近代的な校長像に改宗した。一校の経営を超えて、校長職や教頭職の登用テストとか、後の職場のための教育学の講義の材料を整えていった。活用の場を念頭に入れての新刊書購入はうれしいものであるが、40年の現役生活のうちに貯えた多くの資料を分析してみて、新種の理法でも発見できたら嬉しいことであるし、それにヒントを得て、新規な学生指導の定石でも発見できたら望外の喜びであると思いつけている。

結 論

以上が私の戦の記録の一部である。私が戦記文学に心をひかれるのは、参謀本部編の日露戦史第一巻に戦傷一号士官として父の写真を見て涙を流してから以来である。

時移り歳変って太平洋戦末期に天皇の島、ペリリユーで玉砕した水戸連隊中川大佐の最後の記事を目にした折、米軍の本土上陸を断念させた程の用兵と作戦の妙、部下に対する愛情のこまやかさを真似をしてみよう。と開眼された。同時に次は完全に自己の努力を捨て、仕事の成果を観察し、我なかりせばの逆の価値を導き出したいと思ったのである。悪魔の教育論かも知れない。まことに教師の戦の場は教室であり、学校であるというこの真理は幼稚園から大学まで同様であるから、将来教師ならんとする人の参考になればと記録を抄出したものである。駄文また読者の心琴に訴えるものあれば、以て冥すべく、知る人ぞ知るである。

学校経営における冒険的試行

思うに最近程、教師の姿勢がやかましく言われることがない。文教費の48%が教員の人件費になり、財政が困難になると背に腹はかえられないから、教師の質を向上させるために、幅広い教養を求められるかも知れない。

今でも、小学校の父兄などに大学卒が増加していると言うが、庶民の学歴の向上が、相対的に教師の質を低下させているらしい。

終身免許状と能力無視の悪平等観の上に安住しているのも、ほんの数年間で、優秀な教員志望者のみが待望されるであろう。小数精鋭主義が教育界に流れてくるのも時間の問題であろう。実に欣ばしい傾向である。